

「日書生が送れなくなるほど深刻な神経難病である筋痛性脳脊髄炎／慢性疲労症候群 (ME / CFS)。アメリカの研究拠点、国立衛生研究所 (NIH) から昨年10月に、神経系疾患として研究が強化されるとの朗報が届きました。厚生労働省調査で昨年、患者 (推定で30万人) の3割がほとんど寝たきりの重症者と判明し、日本でも同様の研究の促進が急がれます。NPO法人「筋痛性脳脊髄炎の会」の篠原三恵子理事長に報告してもらいました。

筋痛性脳脊髄炎

神経内科の
病気として
米国で研究強化へ

この病気は、世界保健機関で神経系疾患と分類され、通称ウイルス感染後に発症するというのが欧米諸国での共通認識です。その研究を神経疾患のセクション主導で行うというのは非常に画期的なことです。

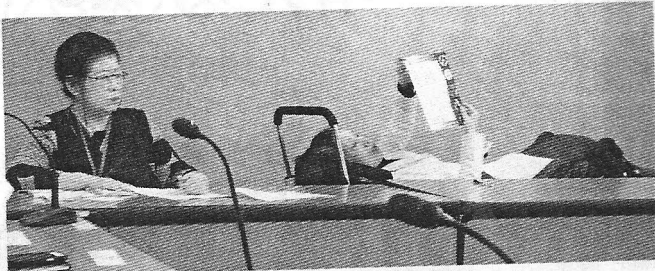
指定難病外で
専門医少ない

今年3月にはNIHから詳細が発表されましたが、日本でもアメリカに匹敵するような研究が、神経内科の研究者によって促進されることを強く願います。

この病気 (筋痛性脳脊髄炎 / 慢性疲労症候群)

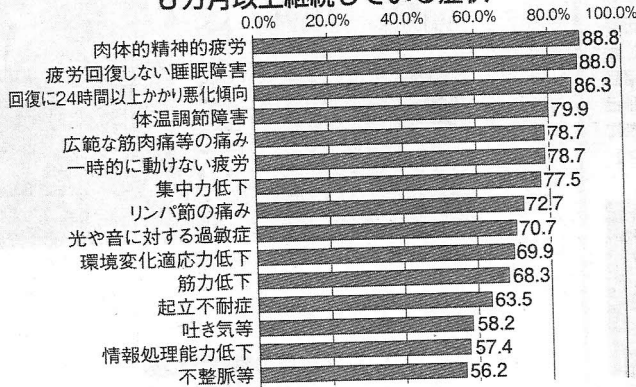
は、日常生活における最小限の活動や簡単な知的作業などによって悪化著しく急激に症状が悪化する

「筋痛性脳脊髄炎の会」理事長 篠原三恵子さんの報告



記者会見で、米国での研究の動向や、治療体制の確立を求める国会請願署名の資料を手に、とりくみを話す篠原さん (右) = 3月末、厚生労働省内

6カ月以上継続している症状



厚生労働省の調査報告書から

免疫研究の重要性明確 治療法求め国会請願署名へ

して身体が衰弱し、回復が非常に困難なことが特徴です。厚生労働省の実態調査 (図参照) で、深刻な実態が明らかになったにもかかわらず、指定難病や障害者総合支援法の対象外です。専門医が非常に少なく、診断すら受けられない方が数多くいます。

今年中に始まるアメリカの研究は、ウイルス感染が免疫機能を変化させ、その後、脳に機能障害が起きるという仮説のもとに行われます。その論拠として、リンパ腫やリウマチの治療薬であるリツキシマブでの治療後、ME / CFS の症状

にも効果があったとするノルウェーの論文等をおげています。研究対象は、感染症のような症状が急激に発症した患者に限定し、免疫の観点からの研究の重要性を明確にしています。この病気の診断基準として世界で一番信頼されている、カナダの診断基準を満たすことも求められます。

治療薬の確立可能性に期待

研究は3段階に分けて行われ、詳細にわたる免疫の検査、MRIでの脳の検査、脳脊髄液の検査、運動前後の神経の変化等の研究が行われる予定です。最終目標は、早期の研究において見つかった免疫機能障害を標的にした治療薬の効果を確かめることで、治療薬が確立される可能性が期待されます。

日本でも国立精神・神経医療研究センター神経研究所において、本格的な研究が開始されました。患者は生活の質の向上に結びつく研究が進められることを願っています。

会)では秋の臨時国会に向け、▽神経内科の研究者の参画による客観的診断基準作成と治療法開発の研究促進▽神経内科の確立▽リツキシマブ等の試験を含む治療法の研究促進一を求めて、国会請願署名をとりくみます。署名用紙はHP (<http://meifsj.wordpress.com/>) からダウンロードできます。

◇ 重症患者の実態を描くドキュメンタリー映画を製作中です。HPのトップページより、製作支援ビデオをご覧いただけます。